

映像の認識

—映像と感覚機能との関係性—

Mechanism of Visualization

Cognizance of Image

映像メディア学科・准教授
Department of Visual Media・Associate Professor

吉野 まり子 Mariko YOSHINO

1 はじめに

カメラが撮った映像は、時に実像よりも美しいと思う時がある。カメラメディアが切りとった映像には、複製美を生産させるプロセスが備わっている。ヴァルター・ベンヤミンが、その複製美の比較対象とし、彼の持論を展開させている一回性の美に異を唱えることになるが、人間の脳の働きに、そのカメラ映像をより美しいと感じさせることがある。その脳作用に影響を与えているのが視覚である。人間の有機な視覚が狙って撮った映像に、カメラという無機質な目がとらえた、思ってもいない構図が写りこんでいるときなど、想像以上の美しさを目の当たりにすることがある。

また、同じカメラレンズを通過した映像でも、呼吸を感じる映像を「見ること」と、すでにコンピューターに録画された素材映像を「見ること」では脳の化学反応が異なることはすでに立証されている。知覚と想像の脳作用の違いである。

後でも述べることになる遠近法の発明によって、マーシャル・マクルーハン(1964)もその高度な視覚メディアの獲得により、「視覚」の役割がますます重要視されるようになったとし、その発展が、部族的な口述文化であった聴覚的世界を抑圧し、やがては近代の個人主義やナショナリズムの形成にまで影響を及ぼしたとしている。また、植条則夫(1990)も、それは、ルネッサンス以前において、社会的にも文化的にも人間の最も重要な感覚機能としてのコミュニケーション手段であった「聴覚」の役割に大きな影響を与えたとしている。そして、その聴覚と視覚の優先順位の逆転こそが、写真、映画、そしてテレビやビデオといったさまざまな近代視覚メディアを生みだす布石となったのである。さらに、その相関関係における視覚の優位性は、21世紀に至る現在まで続いているのである。

本論文は、極めて日常的な疑問から出発をしている。「見える、見る」と、「知る、思う」という、感覚作用と認識作用との相関関係に対する日頃からの関心とその不可思議さへの好奇心から、こうした映像と感覚機能との複雑な関係の糸口を捉えてみたいという動機付けによるものである。そもそも関心と好奇心は、マーチン・ミラー・マークス(Marks:1997,p5)による次のような提起に集約されている。「カメラが見たもの、マイク

が聞いたもの、そのものをそのまま記述描写できる『ことば』はない。つまり、映像と感覚機能との関係には、脳作用のギャップがあり、思考のブラックホールが存在することをさしている。後に触れることになる、非言語(ノンバーバル)コミュニケーションがその負の領域の接続関係に可能性を示唆できるかどうか、容易には見えてこないその終着を、視差をともなった観察からみつめていきたい。そして、当然ではあるが、映像を探求していく際の「知覚」を実践する感覚機能には、視覚や聴覚のみならず、嗅覚、触覚など多様な作用がある点についてもこの考察に含めていきたいと思う。

一口に映像メディアとはいえ、それは、「映像」と「メディア」の複合名詞であり、その意味においては、たとえ国内であっても複数の説明や解説が国語辞典やメディア関連辞書に掲載されており、かえって特定したい意味にたどり着くことが困難に思えるほど定義することが難しいものである。まして、国際的な範疇に拡大すれば、その解釈のされ方は千差万別である。しかし、実際に存在している、またこれから誕生しようとしている映像メディアの形態や存在意義は、映像社会を創造していくこの世の中の「光と影」の概念、つまり「見えるもの(見せるもの)」と「見えないもの(見せないもの)」との関係性を根本にしている。それは、社会的系譜から歴史観に基づく考え方に至るまでの拡大解釈を含めても同様である。

映画やテレビというフォームによって、映像という伝達素材を中枢にして伝えようとするメッセージが、実に重層的な文法で成り立ち、その理解には多次元的にバーバル(言語)とノンバーバル(非言語)・コミュニケーションの相互作用を不可欠としていることは明白である。それらは明示的であり、また暗示的に付加された作用とともに構成され、完成度合を進めたかたちで、強力なマスメディアの伝播に乗せられ、現代社会のくらしの隅々まで行き届いていることが確認できる。一方、バーバルと、ノンバーバル・コミュニケーションの支援がなくては、そのメッセージが制作者側の想定通りに受容される社会文化的領域内ならばともかく、それ以外の領域においては、その領域特有の価値観や解釈によって、元来意図しなかった別の意味として、そのメッセージが受け止められる極めて大きな可能性の存在も想像できる。

本論文では、こうした映像メディアが保有している

メッセージ性の可能性と限界、そして極めて特質的な多様性について、とくにノンバーバル・コミュニケーションの存在意義に焦点を当て、映像とそれを受容する感覚機能として、視覚、聴覚、触覚、そして知覚と認識との関係について考察していきたいと思う。

2 人間の認識機能

多様な社会に根付いた文化というものには、時に想像しがたい差異と未知が存在し、それらが長い時空間の中で醸成され、深く広く浸透していることを目の当たりにする。文化人類学、民族学、民俗学、そして社会学などに基づいたそれらの研究記録や論文は国際的にも数多いが、その中でも岡倉天心の文化的差異に対する思想が興味深い。岡倉天心は、19世紀から20世紀初頭にかけて活躍した思想家であるが、正確には後に日本美術院を創設したため、肩書きは美術評論家となっている。当時の岡倉天心による様々な民族に関するそれぞれの文化論や思想の差異における考え方には、現代に通じるメッセージがある。

例えば、アジアとヨーロッパを対比している解説では、アジアは特に中国とインドを示し、もちろん、中国文明とインド文明の間には明らかな差異が存在していることは認識しているが、ヨーロッパとの比較に及んでは、その中国文明とインド文明間の差異は乗り越えられるものとしている点が興味深い。一方、ヨーロッパは地中海バルト海沿海を示すが、アジアが大陸的、農業的思想を基盤とするという考えに対して、ヨーロッパは、狩猟と戦争、海賊と略奪の歴史を繰り返してきた落ち着きのない海洋的思想が基盤となっている。さらに、アジアが究極と普遍とを求め、人生の「目的」を探る傾向があるとしていることに対して、ヨーロッパでは特殊性に執着し、人生の「手段」を探る傾向にあるなど、岡倉天心の民族における共通性や差異性についての論説が、上田信の「脱近代・脱欧脱亜・脱日本」によって綴られている(上田:1996,p38)。

物事を言語学的にとらえる場合や映像的にとらえる場合にしても、これらの文化論、社会論が含有する思想の差異は必然的に前世から引き継がれ、そこには後発的に試みられる調和や融合が入り込めない聖域を残しながら、現在もさまざまな影響を遮断して不動のま

ま具現化されているように思われる。そしてこれは、あるひとつのメッセージが映像処理技術によって、さらに多層・多様に普遍性を演出しても、伝播されるその映像メッセージに対する同一の解釈や理解が得られないことの根拠でもある。たとえ、その映像メッセージの内容が、全世界的に共有できる知覚に届くであろうと想像できる「平和」、「愛」そして「自由」であったとしても、社会的文化論が論拠するそれらに対する思想の差異は、その想像を裏切り、それらの普遍的イメージの絶対性を否定することになる。

生まれもった性質、くらしの風土、習慣、戒律、信仰、そして志向や意図、意思など、解釈や認識に差異を生み出す要因は複雑であり、それらは、無意識と意識の両極が連鎖している。突然、見たことのないような映像が映しだされた場合、最初それは意味をもたない、ただの形(かたち)にすぎない。しかし、その「かたち」が最初に脳の前頭葉で一体なものであるのか分析され、内面化された後にはじめて、その「かたち」は「イメージ」となり、意味をもって認識されるのである。

そもそも、イメージというものが認識されるというプロセスは、まず図、像、映像などという視覚的刺激が人間の感覚器官に受容されることから始まる。そして、もしそこに音が存在すれば、聴覚刺激となって頭脳の複雑な感知回路を通り、そこでの複雑な分類作業の途中で、そのイメージするものの意味が複合的に判断される。イメージを「みる」ということとは、まさに複合的に「みる」ということの認識であり、意味化のプロセスそのものである。

リタ・カーターによると、人間の感知器官を通じて外から多くの情報が入ってくる時に、頭脳の中の意識的領域と、無意識的領域の両方が有機的に働き始めるという(Carter:1998,p111)。つまり、意識的な頭脳がその対象を見きわめる前に、無意識領域の頭脳が、まずその対象を知っているかどうかという判断を行うというのである。そして、その領域が無意識の領域のため、その段階での頭脳の認識は、まだ「意識」にまで至らない。その後、頭脳回路を進み「意識」に至った情報が視覚的刺激の場合、まず、生きているのか、死んでいるのか、人間なのか、そうでないのかなどといった大雑把な分類が始まり、徐々に具体的な認識プロセスへと進んでいく。

また、入り込んでくる情報が聴覚的刺激である場合、人間のことばなのか、動物などの鳴き声なのか、近く

の音なのか、遠くからの音なのかなどの、大まかな分類が行われる。そしてそれらの分類された刺激群は、頭脳の収納庫に蓄えられている「すでに知っている」という記憶情報と結合し、そこで意味が形成されていくのである。こうして、例えば「私の家」が「我が家」になり、さらには、温かく、安心できる居場所というように、感情的な情報が付加され、認識された意味として記憶されていく。単なる情報として運ばれた刺激が、このような知覚情報処理のプロセスを経て、感情的な層に包み込まれ、やがて「知」となることで、この認識プロセスが完了するのである。

しかし、この認識プロセスには「認識したい」という刺激の対象を感知し、それが何であるかを知りたいという意識的な努力が必要であり、それがなければ認識にまで到達しないとされている。そのために、認識に至る頭脳の複雑なプロセスの中に存在する意識、無意識、さらには知覚、記憶、感情、想像などという働きには、必要条件としてバーバルとノンバーバル・コミュニケーションの組み合わせによる作用が、その認識到達の支援要因として極めて重要であると思われる。

さらに、バーバルという言葉作用についてカーターは、言語やことばの代替として、正式な手話には、口頭言語と類似した文法や構造体系があり、モラルや正義、そして神などといった極めて精神的な概念を意味化し理解できるだけでなく、品行、法体制、宗教などといった、抽象理論を認識、理解することができるとしている。つまり正式な手話は、うなり声やジェスチャーといったノンバーバル・コミュニケーションだけでは認識到達ができない、バーバルな領域であるという違いを示唆しているのである。

それでは、聴覚器官や視覚器官に障害のある人たちにとって、このような外部の刺激がどのように受容され、そして、意味化や認識というプロセスがどのように行われるのか。例えば、その感知の障害が、ヘレン・ケラーのように視覚、聴覚、そして発話障害と、多重の場合の人たちは、それら感知器官の障害に加え、認識到達に不可欠な作用を担うバーバルやノンバーバル・コミュニケーションの機能を獲得できない中で、いったいどのように「知」の回路が働くのだろうか。

ユ・ロトマフ(Lotman:1977)は、聴覚障害と言語との関係について、次のように論述している。言語は、音と活字のふたつの構成要素から成り立つため、発音されることばと活字による、ふたつの認識体系をもつ

である。通常、私たちは本や雑誌を読む場合、聴覚的支援がなくても、直接的にそれらに書かれた活字から情報を得ることができ、内容を理解する。つまり、聴覚に障害のある人たちが、活字を理解することはもちろんのこと、口頭言語と同様の構造体系をもつ手話でコミュニケーションするというのも、ただそこに音が存在しないというだけで、言語コミュニケーションと同様に、「知」の情報処理を行い、その内容を認識し理解することができるのである。

それでは、聴覚の他に、視覚にも発話にも障害をもっていたヘレン・ケラーの場合はどうであったのだろうか。

3 認識のメカニズム :ヘレン・ケラーの場合

ロドニー・コテリルによると、ヒトであるホモサピエンスは、言語と自己意識というものを同時に獲得したとし、前者は、その自己の意識化を行うためには、絶対必要不可欠なものであると主張している (Cotterill: 1993,p384)。コテリルは、言語がわたしたちに理解、分析、そして内省する能力を与えたことを自明の仮定とし、それによって、すべての認識行為は発音される言語、つまりことばによって表明できるものであると述べている。コテリルは、言語と自己意識の関係性についてヘレン・ケラーの障害を基に彼の理論を続けている。

耳が聞こえず、話せず、目が見えないという三重の障害をもって生きていたヘレン・ケラーについては、多くの人が知るところである。ヘレンは、やっと2歳になるとうする1882年におきた原因不明の高熱と腹痛がもとで、3つの大切な機能に障害をもってしまったといわれている。ヘレン・ケラーが綴った自叙伝には、彼女を懸命に支えつづけたアン・サリバン先生について書かれているが、特に興味深い点は、ヘレンが全てのものに名前があることを理解するのに、大変な時間がかかったと回顧している点である。物事を認識するために不可欠な3つの機能に障害があるヘレンが、どのようにしてその物事の現象を「認識」というレベルにまで到達できたのかという記述が続いているのである。

最初からしばらくの間、ヘレンはアン先生が自分の

手のひらに単語のスペルを綴っていることなど分からなかった。それでも、来る日も来る日もアン先生は毎日ヘレンに人形を触らせ、そしてヘレンの手のひらに「人形」というスペルを綴ったという。さらに、ヘレンの手を水道口から流れ落ちる水の中にかざし、「水」というスペルを綴りつづけることで、ヘレンに水とは異なる個体が「人形」とスペルされるものであると気づかせる。そしてヘレンは、その固体とは異なる、流れ落ちる冷たい液体の感触をもつ「水」というものは、その固体とは違うものであることを感じながら、ふたつの異なるものを「認め」ていく。それにより、その水を飲む際に用いる硬い感触をもつ「カップ」という物体もまた、人形でもなく、水でもないものであり、それぞれが名前をもち、差異をとめないながら存在していることに気づいていくのである。

ヘレンは自叙伝の中に「魂の夜明け前」とタイトルをつけ、そこで「・・・私には触覚があったためでしょう・・・何かの前に連れて行かれ、それに触れ、それは、視覚に障害のある人たちが感じとる刺激のような、何か弾みこんでくるような感触を受けるのです。もうひとつ、私には、憤る、満足する、そして希望するということを可能にした、血が通い生きている心がありました。この触覚と生きている心という機能するふたつの要素が、私を、意思をもち、そして思考するというレベルに導いたのです」と述べている。

こうして見ていくと、このヘレン・ケラーのケースは、言語が認識行為の前提であると主張するコテリルの理論に極めて特殊な例外を与えていると考えられる。言語を獲得する前のヘレンの触覚と心の働きというのは、明らかにノンバーバル・コミュニケーションの作用に基づくものであり、それが、意思を表明し、思考し認識するという領域に入ることを可能にした極めて重要な要因であったといえる。

ヘレン・ケラーは、自叙伝の最後をこのように締めくくっている。「私が‘自分’ということはどのようなことなのかを知り、そして、私というものが、このようなものであるのかということがわかった時に、「私は考える」という主体的行為を意識し、それを働かせることを始めました。そうすることで、初めて「自己意識」というものが私の中に芽生えたのです。その自己意識は、今まで私に物事の名前や知識を与えていた「触覚」とは違うものでした。それは私に、今までとはまるで違う新しい感覚を与えられたようでした。「自分」を知って

からは、手に触れる対象の差異を知りながら、それらの名前を覚えていく手段も、依然とはまったく異なる行為のように感じました。感触を自己意識でコントロールできるのです。それは、大変な財産を与えられたように、私の魂を揺さぶるほどの衝撃だったのです。

彼女のことばは、自らの意志とサリバン先生との驚異的な努力が、彼女の潜在能力を有機的に誘発させ、人間が人間らしく生きていくために不可欠である「自己意識」について、わずかな感触という、認識回路には一番遠い、しかし唯一の手がかりを頼りに獲得することができた特異な可能性を証明しているのである。最後に、ヘレン・ケラーがその認識能力を稼働させていく驚異的プロセスの中で、特に本論文の主旨に密接に関連する映像の理解に不可欠な事柄を紹介しておきたい。

ヘレン・ケラーはいくつものさまざまに大きさの異なる人形を渡され、それらのひとつひとつの人形を触り、大きさの違いを知るのだが、大きさの違いがあってもそれらすべてが「人形」というものであるということを理解する場面の回顧録には、ひとつひとつの人形に触れながら、自分がひとつひとつの大きさがそれぞれに違う人形に触れていることに意識的に気づいていくという、個別的印象理解と、一方で、自分が触れている人形の他にも、今触れてはいないたくさんの人形があり、それら全体の中にそれぞれ大小異なる大きさの人形が存在し、それらすべてが「人形」と呼ばれているということに気づくという包括的理解の違いを認識するというプロセスが記されている。これは、17世紀にさかのぼるデカルトの物心二元論を論拠とする議論の展開に触れることになる。それは、あるものをもうひとつのあるものの存在なしに、そのものの本体を理解することができれば、一方が他方と異なることを理解するという理論に重なる。さらに、物である身体と、精神(意識)である心とは同一になることはないとする二元論を、その身体が受ける感覚の内容によっては、精神(意識)の受容機能は多様性を見せるとし、心身合一を認めている点で、ヘレン・ケラーの触覚が自己意識という精神活動を獲得した事実は彼の認識論の範囲を超えるものではない。つまり、デカルトは、ヘレン・ケラーの触覚が意識にむすびつくその可能性を、すでに2世紀も前に明証していたことになるのである。デカルトの認識論の確立後、世界中の哲学者たちは、その認識論への論駁を繰り返すことでその不可思議な身体と精神との関係における研究をつき進め、その結果莫大

な数の著書を残している。現代の理論に照らし合わせたとしても、ヘレン・ケラーの触覚(身体)が心(精神)の感動を実現させ、つまり触覚を起源とする感動が意識を獲得したプロセスは、触覚という感覚機能が感動するという精神活動を稼働させるということを否定するものではないと考えられる。当該論文の著者自身も、極端に異文化であり、かつまた非日常的な状況下における出来事を前に、精神(心)にその認識が届く以前に、すでに身体自身が、それを囲みこむ風景、熱、において、空気の流れなどに感動し、身体が驚愕し、また、身体が恐怖に反応するといった実体験をもっている。それらに基づいてみても、市川浩(1992)が述べるように、「・・・身体が精神である。精神と肉体は同一の現実につけられたふたつの名前にほかならない」という論説の方が、ヘレン・ケラーの「心」の表現にはふさわしいものかもしれない。

これは映像の理解にも当てはまる。これは、岡田晋(1981)の論述にも通じる。それぞれのショットにおいてカットごとに印象を受け、それらの相関的意味を理解していくことと、想像力や期待をとまなう理解を包括し、カットごとに受ける感覚の記憶をもとに、また、カットとして存在させない表現の意味から展開する仮定、想像との関連性を了承し、全体を理解するという文脈を解釈するプロセスというものは、ヘレン・ケラーが獲得した「自己意識」の認識基盤と同じなのである。

4 視覚化のメカニズム

「見る」という意識をとまなう行為、「見えている」という感覚行為のいずれの視覚についても、グラジエラ・トンフォーニは、ものごとを理解するため、そして理解して獲得した知識を共有するための強力な手段であるとしている(Tonfoni:2000,p92)。そして、視覚化ということは、「見る」と、「認識する」というふたつの密接に関連する行為を意味している。まず、目から視覚的刺激が入り、それが網膜に写ることではじめて見えるという「知覚」の行為に至り、次に、網膜に写っている像が一体何なのかを、記憶されている情報や想像力などから認識しようとするという作業が求められるのである。「見えている」と、「見る」という知覚と想像するという行為の関係について、岡田は、サ

ルトルの言及を参照しながら次のように述べている。「知覚と想像は区別されねばならず、同一対象を同時に知覚し、想像することはできない。壁のシミ(知覚されたもの)から人の顔(想像されたもの)を思い浮かべることはできるが、人の顔を思い出した瞬間、壁のシミはもはやシミではない」(岡田:1981,p120)。

また、植条は、視覚を考える場合、「第一に、網膜に映る像(生のままの自然の像)と、人間が見るもの(人間化され、翻案された像)とを分けて考えねばならない」としている。さらに、「専門的なことばを用いるなら前者はヴィジュアル・フィールド(視野)といい、後者はヴィジュアル・ワールド(視覚世界)と呼ばれている」という。そして、それらの関連について、視野という、連続する光のパターンが、網膜で記憶され、人間はその網膜に記憶されたデータを処理し、独自の視覚世界をつくるという。さらに、英語の‘see’をとり上げ、それには「見る」という行為が、「見る」を通じてさまざまな知識を獲得するとし、それらによって視覚的体験を通じて行われる認識、思考といった複雑な作業と頭脳との関係を示唆している(植条:1990,p54)。

また、植条はエドワード・ホルの論述を参照しながら、「見る」という行為は、頭脳がその視覚を意識化することによって実現し、視覚の情報処理が頭脳で行われることではじめて「見る」が成立するとしている(植条:1990,p55)。さらに、こうした視覚のプロセスは、その段階的な認知構造によって、人間の進化や意識の発生の問題とも深くつながりがあると述べている。これは前述したヘレン・ケラーの触覚の段階的認知プロセスと、意識の発生との関係にもつながりがあることをうかがわせるものである。

視覚を構造化したのが、遠近法と呼ばれるテクノロジーである。人類の近代技術の可能性を具現化した3大発明のひとつといわれた遠近法は、15世紀に発明された。それ以前の多くの科学者たちは、平面や平面に映しだされたものを「見る」という行為に執着し、人間の認識情報の95%がその「見る」というシステムを通して入ってくるが、それら平面に映しだされた情報に奥行き、上下、そして前後という空間の存在を表現するシミュレーションを繰り返し、立体視しようと試みた。それらの試行錯誤の蓄積が遠近法の発明につながったのである。そして、そんな当時の多くの科学者たちの実験成果が、現在の絵画や建築だけの領域にとどまらず、映画、テレビ、アニメーション、そしてCGといっ

た四次元の世界をも射程とする視覚産業を席卷しているのである。

5 視覚化を超えて:手話の世界

カーター(1998)によると、正式な手話は、たとえ、発話言語、つまりことばを保有していなくても、発話言語と同様の言語的構造をもっている以上、頭脳はその手話を言語と分類し、認識回路を働かせるという。そのために、聴覚障害や発話障害をもつ人たちは、言語的構造が基盤となる抽象思考の世界に入るために、正式な手話を学ぶ必要がある。

オリバー・サックスは、彼の著書の中で聴覚障害の人たちと手話コミュニケーションの関係について述べている。その中で、生まれて以来まったく手話の教育を受けずに成長した、ある聴覚障害を持つ少年のことを紹介している(Sacks:1989,p38)。その少年は、名前をジョセフといい、11歳であるがひとこともことばを話すことができない。彼は、聴覚に障害をもって生まれたが、彼が4歳になるまで、そんな障害があるという事実にも誰も気づかなかったのである。つまり、ジョセフは、言語を獲得する前に失聴したため、音声というものを耳にしたことがなく、聴覚による記憶、さらにはイメージや連想などという知的活動とは無縁であったのである。

このように、幼少期に言語的構造をもつ手話をはじめとする、有効な言語獲得の措置が受けられなかった場合は、その後も言語の獲得が大幅に遅れてしまうことや、獲得自体が不可能になることさえもある。サックスは、このような先天的な障害の場合は、聴覚障害のほうが視覚障害よりもはるかにその障害のおよぼす状況が深刻であると述べている。さらに、サックスは、言語の獲得に欠陥があることは、人間にとって最も絶望的な不幸であるとしている。それは、言語があっただけで人類の遺産や文化の意義、そしてそれら自身に触れることができ、仲間と語り、そして才能を実現できるからである。だからこそ、その言語がなければ、生来の知的能力を発揮する機会を与えられないまま、障害者というカテゴリーの中でただ孤立していくことになるのである(Sacks:1989,p8)。

しかし、サックスは、古代ギリシャの哲学者アリス

トテレスや旧約聖書の律法に依拠する啞者への差別や、声と耳が神と人間との唯一絶対の対話の手段であるという、当時影響力の大きかった説に異を唱えるように、若き日のド・レベ神父の記述を次のように引用している。「声と舌がなく、それでもなお、たがいに何かを伝え合いたいという意志があるのなら、現に発話に障害をもつ人たちがそうしているように、手や顔、そしてその他の身体部位でもって、おのれの意味せんとするものをあらわしてみるべきではないか」(Sacks:1989,p15)。

サックスは、発話に障害をもつ人たちが行っている多彩な身ぶりのそれぞれひとつひとつの動きを組み合わせることによって、それらが連続的な意味をもったコミュニケーションを行っているように見えるとしている。しかし、実際に動きの連続性があったとしても、そこには手話の「表層文法」のような特定の形式をもつ文法、つまり言語や発話言語と同様な文法や構造がないため、ひとつひとつの動きが何を意味するのか、また、結合された動きが、どのような意味に展開しているのかなどといった想像思考には至っていない。その理由は、シカール神父の疑問に集約されている。彼は、「ことばの代役を務めてくれる身ぶりによるコミュニケーションには、私たちのコミュニケーションのように、頭脳で感覚を意識化させ、頭脳で概念を獲得するやり方のほかに何か足りないのではないか。それは、それら身ぶりの組み立てや結びつきを規定するシンボルをもたないことであり、それによって発話障害をもつ人たちと、その他の人たちとの間に、コミュニケーションギャップを作っている」と憂慮した(Sacks:1989,p82)。

カーターは、「発話言語と同じ文法と構造をもった正式な手話を覚えた人は、それが一定の規則に則ったコミュニケーション手段となり、脳はそれらがコミュニケーションシンボルをもたない身ぶりや悲鳴、ため息やあえぎなどとしては扱わず、たとえ言語要素の単語をもたないにしても、言語構造と文法が存在していることから、それらを言語領域で認識する。それによって、記憶する、想像する、概念化する、反省する、演じる、計画を立てる、さらには仮説を立てる、可能性を考える、比喩するなどといった抽象思考の世界に入ることができる」と述べている。そして、ひとたび想像力の世界に入れた場合には、頭の中で作られる概念に限界はなく、思考の昏睡とは無縁のコミュニケーションを実践でき

ると続けている(Carter:1998,p203)。

カーターの示す標準性をもち合わせた文法的構造をもつ正式な手話が確立するまでには、例えば、村人の使う手話と、村人たちの生活上では実質的に接触がない都会で使われている手話とでは、お互いに意味が通じないなどの不都合が山積ではあるものの、長い時間をかけながらもその到達には至った。紀元前にアリストテレスが発話障害者と概念の理解について議論を展開したことをはじめとして、16世紀の哲学者カルダンが「ことばを聞き取らなくても概念は把握できる」という革命的理論を打ちだし、さらには、18世紀の中心的研究者であった、ド・レベ神父による「聾啞教育概論」の刊行など、手話の研究は何世紀にもわたって続けられ、その足跡は長い。しかし、手話の世界における言の葉の獲得には、通常の域を超える、思惟の深みと慟哭をともなう激烈な歴史を、今も刻み続けている。

サックスは、幼少期に失聴し、手話というコミュニケーション手段を長年知らなかった聡明なピエール・デロージュの場合を紹介している。デロージュは、発話障害をもつ人としては最初の著書「観察記」を1779年に刊行している。彼はその「観察記」の中で、手話を知らなかったために、論理的な会話を実践する領域に入ることができなかつたと自ら回顧している。しかし、たとえデロージュが手話を習得できていたとしても、当時ではそれはデロージュと同様に発話障害をもつ人からの学習であることが通常であったため、それだけでは抽象論理や知性を働かせるプロセスには至らなかりか、発話という自分の思考を内なる自己へ伝達する機能をも喪失したままであったと続けている(Sacks:1989,p18-20)。

話はジョセフに戻るが、彼は先天的聴覚障害児であったにもかかわらず、4歳になるまで彼自身も彼の周りの人間たちも誰もそのことに気づかなかつた。ようやく、耳が悪いということが判明した後も、聞こえない、話せないということから、知能や精神面に障害がある少年として扱われてしまう。そんな中であって、サックスはブレイフィールド聾学校に入学したばかりのジョセフに出会うのである。ジョセフはすでに11歳になっていたが、言語というものをまったく習得していなかった。ジョセフは彼の周りで何かが起きていることは感じとってはいたが、それがいったいどういうことなのかを理解できずにいた。その後も、正式な手話の教育をまったく受けられずにいたために、話すこと、

書くこと、そして手話によってものごとを描写することがどんなことなのか分からないまま、意思の疎通やコミュニケーションをほとんど理解できずにいた。

しかしその後、少しずつ簡単な手話を覚え始めたジョセフは、生まれてはじめて他者との意思の疎通を知り、手話を通じて連続する会話をし始めていく。サックスはそのジョセフの喜々とした姿を印象的に次のように記述している。「ジョセフは明らかに手話による思考への扉を開くコミュニケーションに喜びをみだし、楽しんでいた。1日中、まして週末も会話の相手がいる学校にいたがるジョセフだったが、学校の規則に従い、週末ジョセフは会話をする相手のいない家に帰るのである。週末明けの月曜日にジョセフがどのように週末を過ごしたのかと質問してみると、まずその尋ねられている「質問」という概念が理解できないことや、昨日や1日前などといった「時」の感覚の把握が欠如していることなどがわかってきたのである。しかし、ジョセフにはきわめて優れた視覚能力、つまり、高度な視覚的判断力や、視覚的パズルを解決する能力が備わっていた。しかし、その視覚能力がかえって言語知能の未発達を際立たせていた」(Sacks:1989,p84)。

ジョセフは絵を描くことが好きだったため、それが徐々に、部屋の見取り図や漫画へと展開していく過程を見ることで、サックスはジョセフがすでに視覚情報を概念化させることを獲得しており、ジョセフの視覚知能の存在を確認できたと述べている。しかし、それは、視覚から獲得した情報に基づく知能に限られたものであり、その知能によって言語を主体とする抽象概念を把握したり、仮説や可能性の時空を過ごすことや、比喩の領域に達することはできなかった。さらにサックスは、このようにジョセフの知的機能に明白な制限があったとしても、ジョセフが正常に作用する知能を備えていたとも述べている。つまり、ジョセフ自身の知能に障害があったわけではなく、またジョセフの精神に欠陥が存在していたわけでもない。ただ、それらの知能や精神がいままで十分に活用されてこなかっただけなのである。

サックスは、「思考と言語は、生物学的に、まったく異なる出自の方法である・・・」と断言している(Sacks:1989,p40)。これは、コテリル(1993)が主張するように、すべての思考行為が言語を根本とし、両者は絶対必要条件として有機的に存在しあわなければいけないとした説に対し、ヘレン・ケラーの場合と同様に、新たな例

外を提示していることになる。

サックスが実証しようとした極めて優れたジョセフ少年の視覚知能のような、言語の認識回路を別とした知能は、現代の映像をどのように「見る」のであろうか。バーバル・コミュニケーションという言語支援をもち、視覚能力が先行する見方は、文化圏の異なる風土が醸成し続けている映像の見方に共有する特質を備えているのかもしれない。

さらに、ジョセフ少年の視覚能力は、モーツァルトやピカソによるイメージをコントロールする能力に類似するものであると考えることもできる。つまり、モーツァルトの頭の中の楽譜に描かれた数え切れない音符が奏でるメロディーや、ピカソの繊細で大胆な絵図の複雑で抽象的なイメージは、その脳内にしか存在しないものである。そして、それらを実際の音階の上や白いキャンバスの上に具現化させていったのは、彼らにたぐいまれなる脳内イメージを操作する感覚能力が備わっていたと思われるからである。

6 おわりに

従来の学説が唱えてきたように、知的コミュニケーションが成立するためには、言語は絶対的で必要不可欠な要素である。しかし、今までの限られた論考ではあるが、そこから理解できるように、言語に加え、多様なコミュニケーションの大きな可能性として重要視できる新たな要素として、言語を前提としないノンバーバル・コミュニケーションが、抽象思考や抽象描写、つまり、脳内イメージを具現、具象化するといった、さらなる広域領域に入り込む可能性をもつことを十分に示唆していることがわかる。

映像が、視覚言語として議論され、映像論や記号論に登場することは多い。そして、具象を根本とする映像の存在とその表現は、抽象性を基盤とする言語活動を必要とすることで、両者の単なる比較論を超えた関係を創造している。つまり、映像は、それ自体で意味することは実に多い。それと同時に、映像だけでは意味できないことも非常に多い。この世の中に存在する7,000以上の言語をその基盤とする多様な文化圏に理解される映像メッセージは、言語の支援を不可欠なものとしている。

しかし、これまで行ってきた考察は、その言語をもたない世界に生きる場合が対象であった。そして、それが示唆するものは、ノンバーバル・コミュニケーションを实践する視覚、触覚、聴覚が、言語を不可欠とする認識行為を実現させる手段となることであった。さらに、マルクスの提起した知覚と認識との脳作用のギャップを穴埋めできる可能性を示唆してみた。同時に、人間の映像を含むあらゆるコミュニケーションに通底する、深遠で原始的な「表現」への欲望にも触れることになったと考えている。

古代から学問の四天王のひとつといわれたのが哲学である。今から2,500年以上も前にそれを極めたプラトンは、視覚というシステムをその中枢とする光学装置で創造される映像というものに「光と影」という観念を与えた。そしてその後、その「光と影」は数え切れないメッセージとなり現在の映像社会を築きあげた。たとえば、そのメッセージが認識され社会に意味化されていく領域が、言語文化圏内という限界はあっても、前提に言語を求めない、または別の思考回路を刺激する要素により、その言語文化圏を超越するものが映像であり、映像メッセージなのである。そして、その認識に幅があり、差異が認められたとしても、それが映像コミュニケーション独特の血の通った活動であり、楽しさなのかもしれない。

哲学はもとより科学の本質は、批判、反証を繰り返しながら真理を追究するものである。映像は事実を映し出すメディアであるが、真理を追究するものではない。事実を伝えるといえども、時折襲いかかる「何のために伝えるのか」の自問にさいなまれるたび、その方法論は変容を繰り返す。映像は、美醜善悪を伝えるが、それは真理の基準とは異なるものであり、それを追求するものではない。むしろ、真理を探究しつづける過程をその対象とし、尊重し、そして把握しようとするものであると思われる。

このような魅力と不可思議さをもちあわせた映像の伝播力については、まず一番身近な人間の感覚機能である視覚、聴覚、嗅覚、触覚などによる知覚を経由し、認識・理解へつながり、さらに考察・思考、そして想像・予測などへ展開していく映像の多様な受容過程を理解しておくことが重要かつ不可欠である。それは、今後ますます増大すると思われる特定、または不特定多数の映像を「見る」ひとつの多様な感覚機能を理解する

ことであり、その多様性に誠実に対応すべき映像社会の構築を再考する際の一助になりうると思われるからである。そのひとつとの中に、現代のヘレン・ケラー、ジョセフ、そしてデロージュがいる。彼らは現代の邁進するテクノロジーに憑依された映像とともにあり、たとえ映像メッセージの認識が行われたとしても、それらがどのように彼らに認識されるかについての分析およびその新しい方法の展開は、これからの課題として残されている。さらには、ひとつと映像とが多層に循環する関係を把握する必要があり、これは見る側、制作する側などといった単純に2分割された映像コミュニケーションのあり方とは異なる、今後の新しいバリエーションの姿を見据える時期を提供することになると思われる。

そこから、未来の映像社会が垣間見えるのではないかと期待するものである。

<参考文献>

- Carter, Rita
Mapping The Mind, London: Weidenfeld & Nicolson 1998
- Cotterill, Rodney
Enchanted looms-conscious networks in brain and computers, Cambridge: Cambridge University Press 1993
- 市川浩
「精神としての身体」講談社 1992
- Lotman, Yu. M
Semiotics of Cinema, Japan: Heibonsha Ltd. Publishers 1977
- Marks, Martin Miller
Music and the Silent Film, New York: Oxford University Press 1997
- McLuhan, Marshall
Understanding Media-the extensions of man, London: Routledge 1997
- 岡田晋
「映像学・序説」九州大学出版会 1981
- Sacks, Oliver
Seeing Voices, USA: University of California Press 1989
- Tonfoni, Graziella
Visualization of Textual Structures in Yazdani, Masoud and Barker, Philip (eds.) Iconic Communication, London: Intellect Books 2000
- 植条則夫
「映像学原論」ミネルヴァ書房 1990
- 上田信
「脱近代・脱欧脱亜・脱日本」現代思想 青土社 1996